

ちひろが描いた花

執筆者：原島恵

掲載誌：「小笠原流挿花」2024年7月号（一般財団法人小笠原流）

いわさきちひろと花

いわさきちひろ（1918-1974）は生涯、子どもを描き続けた画家です。彼女は、第二次世界大戦後、子どもの本を舞台に活躍しました。1956年に、初めての絵本『ひとりのできるよ』（小林純一・作 福音館書店）で、自身の息子をモデルに幼児の生活を描き、子どもが描ける画家として評価を得るようになります。その後、55歳で亡くなるまでの17年間に40冊あまりの絵本を手がけています。絵本のほか、カレンダー、広告、育児書、教科書などに絵を描いています。ちひろの絵は、印刷物を通して人々のくらしのなかに溶け込み、日本中で親しまれるようになりました。

現在、ちひろ美術館（東京・安曇野）には約9650点の作品が残されています。そのなかで、ちひろが子どもに重ねて、数多く描いたのが「花」です。野に咲く花や、園芸種の花のほか、物語のなかで幻想的に咲く花など、数多くの花を描きました。同定できる花の数は80種類以上におよびます。ちひろは、子どもと同様に花へ愛情を注ぎ、それぞれの個性を慈しんで描いています。

花のあるくらし

現在、ちひろ美術館・東京が建つ練馬区下石神井は、ちひろが、1952年から亡くなるまでの22年間を過ごした場所です。彼女はここで、最愛のひとり息子の成長を見守りながら、絵を描き続けました。まだ息子が小さかったころのちひろの家計簿を見ると、つましい暮らしぶりのなかでも、花だけは惜しまずに購入していたことがわかります。当時は、花売りが荷車に花を乗せて巡回していたようで、自宅の前で花売りからチューリップを買うちひろの写真ものこされています。《ままごと》（図1）は、自宅の庭で遊ぶ息子とその友だちの姿



図1 ままごと 1963年

を重ねて描いたものでしょう。子どもたちを取り囲むように、地植えのカーネーションやフリージア、シクラメンの鉢が描かれ、ちひろが丹精していた庭の様子をうかがい知ることができます。ちひろは制作の合間に庭に出ては、庭仕事に熱中していました。愛犬チロの散歩の折に、道端に気に入った色のスマレを見つけ、移植ごてですくって庭に運んでくることもありました。パーゴラに大輪のバラを咲かせていたほか、あるときには、アーチのように山百合を並べて植えたり、白とピンクの芝桜で地面を覆ったり、庭のほとんどをマーガレットで埋め尽くしたりしたこともありました。ちひろにとって、自宅の庭は、花で絵を描くもうひとつのアトリエでもあったのでしょうか。

1966年に、ちひろは長野県の黒姫高原にアトリエを兼ねた山荘*を建てます。絵本画家として活躍するようになったちひろは、ここに滞在して制作に集中するようになります。幼いころから両親の郷里である信州の自然に親しんできたちひろは、自然に囲まれた山荘で心を開放し、創作意欲を高めて数々の絵本に取り組みました。草花を題材にした宮沢賢治の童話を編んだ『花の童話集』（宮沢賢治・作 童心社）もそのひとつです。この作品に描かれた草花や自然の風景には、黒姫の澄んだ光と風が映し出されているようです。ちひろは、黒姫で賢治の詩を暗誦しながら野山を歩き、摘んできた草花を山荘のいたるところにいけて楽しむこともありました。

ちひろが花に託したもの

東京と信州にアトリエを構え、絵本画家として忙しく過ごす日々のなかでも、ちひろはつねに花を愛でていました。ちひろは、次第に絵のなかから余分なものを省き、余白をいかした画面に花と重ねて子どもを描くようになります。例えば、《あやめと少女》（図2）では、



図2 あやめと少女 1967年

背景には何も描かず、大小さまざまな大きさのあやめの花に囲まれた少女の姿を描いています。あやめは、赤から青までの異なる階調の紫で彩られ、濃い色の花が外側に、薄い色の花は中央に配置されています。絵具が乾ききる前に、濃い色や異なる色を落として画面上で絵具をにじませる「たらしこみ」という技法を用いて、巧みににじみをコントロールしながら、複雑な花卉のかたちをとらえています。紫を基調とした画面のなかに、青の補色の黄色と赤の補色の緑がポイントで彩られ、いきいきとしたリズムがうまれています。中央の余白と画面右側を占める大きなあやめの花卉の淡いにじみは、初夏のさわやかな日の光を感じさせます。この絵では、あやめは大きく、少女は小さく、スケールを変えて描かれています。あやめと同じ紫で装う少女は花の精なのかもしれません。あるいは、いっせいに咲き誇るあやめを見たときの、少女の心の内に広がる感動を大きなあやめとして描いたのかもしれません。あやめと少女のみずみずしさが重ねて描かれています。

《チューリップのなかのあかちゃん》（図3）も現実とは異なるスケールで花と子どもをと



図3 チューリップのなかのあかちゃん 1971年

らえた作品です。ちひろが駆け出しの画家時代から繰り返し描いたアンデルセンの童話『おやゆびひめ』の一場面を彷彿とさせます。あかちゃんのしっとりした肌の質感や、弾力のある体つきは、輪郭線を用いず、水彩の濃淡だけでとらえています。そこには確かなデッサン力とともに、ひとりの母親としての実感も込められているようです。淡い色彩のなかで、ひととき目を引くのは、あかちゃんのつぶらな瞳です。まだことばを知らないあかちゃんは、そのまなざしで何かを語りかけているようです。ちひろが、

チューリップとあかちゃんに託して描いたのは、かけがえのない、いのちそのもののなのかもしれません。

ちひろが最後に手がけた絵本のなかでも、花は象徴的に描かれています。1972年5月、ちひろは、画家仲間とのグループ展に《こども》と題した3枚の絵を展示しました。そこには、これまでちひろが描いてきた子どもたちとは異なる、傷つき、心を閉ざした子どもの姿が描かれていました。この3点の絵をきっかけに生まれた絵本が『戦火のなかの子どもたち』（岩崎書店）です。1961年から始まったベトナム戦争はしだいに激しさを増し、そのようすが報道されると、世界中で反戦運動が広がっていきました。かつて東京山の手空襲で家を焼かれ、炎の中を逃げ惑った経験を持つちひろは、自らの戦争体験とベトナムの戦場に生きる子どもへの想いを重ね、習作も含めて50点近くの絵を描きました。このころ、ちひろは体調を崩し、入退院を繰り返すようになっていましたが、病をおして1年以上かけて取り組みました。試行錯誤の末、15の場面に詩のようなことばを添えて、絵本をつくりあげました。表紙を開き、爆撃機の影におびえる少女の後ろ姿が描かれた扉をめくると、最初の場面があらわれます。見開きいっぱいにシクラメンの花が描かれ、花のなかから子どもたちの顔が浮かびあがります（図4）。この場面は、次のことばから始まります。



図4 シクラメンの花のなかの子ども

1973年

「赤いシクラメンの花は きょねんもおとしもその
まえのとしも 冬のわたしのしごとばの紅一点 ひとつ
ひとつ いつとはなしにひらいては しごとちゅう
のわたしとひとみをかわす」

この絵とことばから、画机の前に座り、傍らにある鉢植えのシクラメンの花と語らうちひろの姿が浮かび上がります。ちひろが花に重ねて見つめていたのは子どもたちの心でした。続く場面には、心が傷ついた子どもたちの姿が、鉛筆と墨を中心にモノトーンで描かれています。最後の場面に、再びシクラメンの花が登場します。鮮やかな赤で描かれたシクラメンには、「世界中のこどもみんなに 平和と しあわせを」ということばを残したちひろの祈りが込められているようです。

*ちひろが黒姫高原に建てた山荘は、現在、長野県上水内郡信濃町にある黒姫童話館に移築されています。また、長野県北安曇郡松川村にある安曇野ちひろ美術館に隣接する安曇野ちひろ公園には、復元した山荘が建てられています。

◎参考文献 ちひろ美術館編『ちひろ 花の画集』（講談社エディトリアル 2009年）

松本猛『「戦火のなかの子どもたち」物語』（岩崎書店 2004年）